



先輩の
夢を見た日



禊川仁

夢を見ると、つらい。

卒業の季節はとっくに過ぎて、生徒会室にはもう先輩の影はない。

他の男子とは全然違った先輩。もうあんな変わった人には二度と出会えそうにない。

スポーツができるわけでもなく、頭がいいわけでもない。

努力家ですらない。

でも、面白そうに楽しそうに生きていた人。

ずっとそう思っていた。

でも先輩はあの日、泣いていた。

学校の裏庭の榆の木の下で、なぜか悲しそうに泣きながら歌っていた。

すごい音痴な声で。

それが妙にかわいくて。

妙におかしくて。

切なくて。

そこに本当の孤独があった気がした。

先輩はきっと恋してるんだなあって思った。

それからずっと先輩が気になって。

私もどんどんつらくなって。

いつも明るくおどけた先輩の下の素顔。

この人はきっと私の知らない孤独に生きている。

そしてそれを隠す強さを持っている。

それって素敵なことじゃないかな。

先輩が好き。

でも先輩には泣きながら歌を歌っちゃうくらい、真剣に好きな人がきつといて。

私はどうしようもなくて。

そして先輩は卒業してしまった。

毎日先輩の夢を見る私。

いますぐ会いに行きたい。